道臨工
透析施設へ人的支援
コロナ禍で派遣要請に対応

道臨工は、新型コロナウイルスの感染拡大が続く中、登録制による人的支援に着手した。道や透析関連学会等と連携し、透析施設で感染者や濃厚接触者となり医療従事者の出勤停止者が複数発生した際に、臨床工学技士を派遣し、透析医療の継続を図る。

道内では札幌市を中心にクラスター等が多発し、臨床工学技士が従来の業務を継続できない透析施設も目立つ。

診療所など臨床工学技士数の不足が発生した施設を念頭に、同会の橋本佳苗副会長（札医大病院臨床工学部）と、小塚麻紀札幌北楡病院臨床工学技術科技士長が中心となり、人的支援対策ワーキンググループを発足。行政や関連学会等と協議を重ね、具体的な支援体制の構築を進めてきた。

札幌透析医会、北海道透析医会、北海道透析療法学会、北海道透析看護認定看護師会、北海道DLN連絡協議会とともに「COVID-19透析スタッフ支援事業本部」を設置。医療機関からの派遣要請を道・保健所、同本部が受け、受援施設の状況を踏まえて医師、看護師、臨床工学技士らの派遣・準備連絡を道医などの関係団体と協議し、道が支援医療機関に透析スタッフの派遣協力を依頼する。道臨工は、同本部の要請を受けて事前登録者の中から派遣依頼調整などを担う。

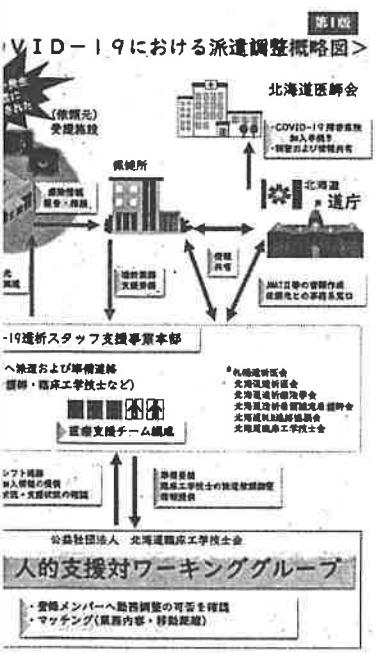
派遣システムの準備段階で、保健所から透析施設での臨床工学技士不足が伝えられ、すでに同会からスタッフを複数回派遣しているという。

こうした緊急派遣では、引継ぎなしでコンソール操作などが求められる可能性もあり、支援スタッフの登録については、透析医療への従事歴や穿刺歴のほか、使用経験のあるコンソール名、PPE使用やCOVID-19対応経験の有無、集中治療室・手術室・内視鏡室などの他部署での対応の可否などの記載欄を設け、登録には所属施設の了解を必須としている。

これまでの派遣経験を生かし、事前準備等のフォーマットづくりを進めているほか、受援スタッフと派遣スタッフが、前もって打ち合わせできるシステムの整備も計画している。

スタッフやその所属施設の負担などを考慮すると、離れた地域への派遣は難しいことから、道臨工が今年度から導入している支部制を活用し、全道9支部の協力を得て、地域派遣体制の確立を図る考えだ。

派遣スタッフの登録は始まったばかりだが、派遣要請は多く、ワーキンググループメンバー等で対応しているのが現状。普段から臨床工学技士のマンパワーが不足している施設も少なくないことから、橋本副会長は「今回の取り組みを、多くのスタッフや施設管理者に理解してもらえれば」と協力を呼び掛けている。



派遣システムの図

恵庭市の医療・福祉職が連携
感染対策のチーム活動を展開

恵庭市内の医療・福祉関係者、市職員の有志が集まり、「えにわ感染対策チーム『こびりんず』」（代表、樋口秋緒恵み野）は、感染リスクの高い高齢者をメインターゲットに、新型コロナウイルス感染拡大予防に向けた地域密着の活動を進めている。

「地域でできることは自分たちでやろう」を合言葉に、訪問看護ステーションや地域包括支援センター、デイケア、薬局の題として考え、誰もが感染する（している）ことを前提に、「他人にうつさない思いやりの心」を目的に展開。ガイドライ

メンバーがパネルをつくり、ベントで展示

栄養相談室リニューアル
北海道循環器 環境整え再開

中央区の北海道循環器病院（大堀克己理事長、堀田大介院長・95床）は、栄養相談室と併設するキッチンをリニューアルし、感染防止対策を徹底した上で、実技型健康料理教室を再開した。

循環器を専門とする同病院は、各種手術やカテーテル治療、心臓リハビリなどを通して、急性期から一般までの幅広い医療を展開。併せて、患者の在宅での生活習慣見直しによる再発予防の一環で、管理栄養士がレシピやえ、学ぶ教室として感染から栄養たが